

---

# マイ・アイ

侑来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マイ・アイ・

### 【Zコード】

Z3499K

### 【作者名】

侑来

### 【あらすじ】

むかしむかしあるとこに、歌姫がありました。

\*\*テスト投稿とリハビリ兼ねてます

びりり、びりり、なんて音が聞こえてきたもんだから、何事だと  
思つて振り返つたら葵が何かの紙を引き裂いている真つ最中だつた。  
ひらひらと葵の手から零れる紙は、まあ雪のようには見えない。何  
をやつているんだ我が妹は、いや、紙を破いているのだろうけれど。

「……何してんの?」

「紙破いてる」

思わず口を開いてしまえば視線も合わされずにそんな言葉が返つ  
てくる。見たまんまの説明だ。それからじばらく待つてみたけどや  
つぱり彼女はその続きを口にしないので、なるほどと小ちく呑いて  
から捻つていた体を元に戻し再びキッキンに向き直つた。

びりり、びりり、未だ続くそんな雑音を背景に、やかんで沸かし  
たお湯をティーカップに注ぎ入れる。カップの中にはなんとかかん  
とかという名前の、葵に言わせれば高級茶葉。無論それは葵専用の  
ものなので、俺が紅茶を飲む場合はこれまたなんとかかんとかとい  
う名前の、セールで買った安ーい茶葉だ。俺にはその違いがとやら  
がよく分からぬ。

びりり、びりり、そんな音がふと止んだと思つて、や、次いでくる  
声は葵のそれ。

「紅茶まだ？」

「じこかのお姫様ようじく、すでに自分の分を淹れ終わった俺に紅茶を要求するのだから葵の俺に対する扱いは歴然だ。全くもって非道いものである。いくら同じ年だからといって、お兄ちゃんは大事にするものではないのだろうか？」

けれど実際そんな権限は俺には無いので、ソーサーをカップの上にかぶせながら、あと少しだけ待つてとだけ言ひておく。

「砂糖は一杯ね」

「はいはい、分かってるって」

投げやりに答えつつ、この暇な待ち時間、自分の分にと淹れた紅茶に手を伸ばした。入れっぱなしにしたティーバッグを出してそのままシンクの中に投げ捨てる。一口啜つてみてなんだか味の薄い気もしたが、それより気になるのは再開した紙を破る音だ。今度は体ごと振り返る。

リビングにはソファに座る葵の横顔。いやにしかめつ面。楽しそうに紙を破いているよりはましか。彼女の両手は仕事熱心らしい、裂いては捨て、裂いては捨て、をひたすら繰り返す。その下のフローリングには紙の残骸と思わしきものが四散していく、あれを掃除するのは誰なんだろうと紅茶をまた一口啜つた。もしかしたら俺かもしれない。これまでの経験上俺しかいなかつた。

葵の足元には結構な量の紙屑が広がっているが、彼女の隣にはきちんと形状を保っている数枚の紙の存在もあった。あれも全部破り捨てるつもりだろうか。今からゴミ箱を差し出せば被害は少なくなるかもしれない。思いもしたが、今更行動に移すのも面倒だった。シンクに少しだけ凭れかかる。

「……何してんの？」

「紙破いてる」

「何が書かれた？」

「文字」

「……なんで破つてんの？」

「むかつくから」

「紙が？」

「全部」

内容の読めない会話を繰り広げながら、けれど葵の手は紙を破ることを止めない。声はだんだんと棘が増してきている。その表情も先程より厳しいものになっているようないような。全部むかつくって俺のことも含まれてるんだろうか、だったらもう黙ろうか、八つ当たりをされて困るのは俺だし。一瞬だけそんなことを考える。

やがて紅茶の存在を思い出し、とりあえず持っていたカップを置いて砂糖を取り出した。ソーサーを外せばたちまち立ち昇る白い湯気、独特なその香り。赤とも茶とも言い難いその水の中にティースプーンきつちり山盛り一杯の砂糖を入れる。そのままぐるぐると搔き回していれば背後から名前を呼ばれた。

「ちよつと待つて。今持つてくから」

どうせ紅茶の催促だらうと後ろも振り返らずに言つ。水蒸氣で濡れてしまつたソーサーを拭いて、その上にティーカップを置く。知つたら怒るだらうけれど言わなければないことだ。そうして葵と俺の分のカップを持ち上げたときに聞く、

「違う。紅茶もだけど。 梓がやればいいのに」

びりり、びりり。

葵の言葉を脳内で咀嚼しつつ、リビングに足を踏み入れる。ティーカップは持ち手が右にくるよう恭しく、ソファの正面にあるローテーブルに置く。最後に紙屑が入らないよう、けれど葵から遠過ぎないよう距離を調節して、自分のカップもその隣に置いた。もちろん俺の分のソーサーなんて代物は無い。

「梓がやればいいのに」

「一回言わなくたって聞いえてるよ。俺に何やうかの氣なの」

「歌姫ー。」

それからの葵の行動は早かつた。フローリングに散らばった紙屑を片手で握り締める勢いよく俺に投げ付けてきたのだ。一連の動作は滑らか。動きに一切の無駄を見せなかつた。そんな達人芸こそで要らない。もちろん紙なのでそれらはふわりふわりと巻き上がり、多少体に当たつたところで痛くも痒くもなかつた。心配なのは紅茶。山羊になるのは「めんど」だ。

「歌姫 、」

まるでオウムのよつよだの言葉を繰り返す。「いやイソコ? でもまあ歌を歌うのは鳥だ。どうひして同じおれら。」

体に降りかかってきた紙屑を落としていれば視線を感じたので顔を上げる。と、ようやく葵の顔を正面から見ることができた。俺と同じ顔。同じ髪色。同じ田の色。まるで生き物。『自分を見ていいようだ』。ただし違うのはなんとなく苦しそうな表情、だとか。

「「」こんな歌はうたいたくない」

「……それは駄目だよ、歌姫なんだから」

「だけど、」

葵の隣に置いてあつた、一枚だけ元の形を保つていた紙を取り上げる。書かれていたのは五線譜、躍る御玉杓子、平和を謳う平仮名と片仮名と漢字と。なるほど、先程からびりびりびりびり破つていたものは歌だつたらしい。せつかく人に作つてもらつた物なのもつたない。それでも彼女にしてみれば余計なお世話そのものか。

「梓が歌えばいい」

「葵、」

「同じだもん。誰も気付かないでしょ」

「嫌だよ、そんなの。それにいくら同じでも違つものは違つでしょ」

例えば性別とか。性格とか。背丈とか。声色とか。歌とか。いくら双子だつてね、おんなじ人間ではないんだからね。

珍しく葵が落ち込んだような悲しんだような顔を見せたので思わず拍子抜けしてしまつた。珍しい、珍しい、そんなにもこの歌が嫌だつたのだろうか。今までお姫様を突き通してきた彼女だつてここまで反発する」とはなかつたのに。

手の中にあつた歌を丁寧に折り畳んで葵に手渡す。案の定、それはあつさつと真つ二つに破られてしまった。眉間に皺を寄せながら、彼女は無言で紙を破り続ける。皺が取れなくなるよと洒落てみよう

かとも思つたけれど、これ以上ひどくなられても仕方無いので口を噤んだ。視線をローテーブルに落とす。一つ並んだ赤茶色、白い紙が浮かぶカップにソーサーの姿は無い。

「あたしは、あたしは、うたうのが、すき」

「うん。紅茶冷めちゃうよ」

「歌わされるのなんて、大つ嫌い」

びりり。そこで紙が引き裂かれる音はぱつりと止んだ。直接紅茶の中に指を入れて浮かぶ紙屑を取り出す。行儀が悪い気もしたが、紙が入った時点で行儀も何も無いのでこれは致し方無い。部屋の隅で突っ立っていたゴミ箱を片手に、散らばった紙屑らを片つ端からその中に入れていく。

「俺は好きだけどね」

「なにが？」

「歌う葵が」

「あたしは歌わない梓が嫌い」

葵の右手がソーサーとティーカップを持ち上げた。猫舌だから火傷しないといいけれど。思った瞬間ゴミ箱の中にそれらが降つて

きた。

「あいつらは歌姫が欲しいだけだから」「自分が歌わなくても」「平気なの」「。葵じやなきや意味が無い。男は」「歌姫になんてなりたくないかった。」「声がすき」

「楓！ 歌姫の時間よ！」

むう、今いいところだつたのに。なんて空氣の読めない大人だ。鏡を見なくとも自分の顔が不機嫌に歪むのが分かる。というか鏡に映る自分は不機嫌そうだ。眉間に、皺。取れなくなつたらどうしてくれる。

最後の仕上げにもう少しだけ髪の毛をいじつて、鏡の向こうの楓じぶんにピースサインをつくつてみる。

「いってきます」

と、その前にリビングへ戻つて、ローテーブルの上に置きっぱなしになつた一杯目の紅茶を一口だけ啜る。うーん、少しだけ味が薄い。後味微妙。今度からはちゃんとやつて砂糖も一杯ぐらい入れてソーサーも使おう。よし、決意。帰つてきたら即効実行だ。

ポケットに入れておいたカンペをゴミ箱に放り投げる。あ、おしい。あと三センチ右。仕方ないのでまた拾つて、今度はゴミ箱の真上から紙屑を落とす。はらりはらり落ちていくそれは赤茶色に。

「楓！ まだなの？」

「はいはいはい！ 今行きますー！」

さて、歌姫の時間だ。

今日も声を高らかに。あたしは俺に、俺はあたしに、わたしはわたしに平和をうたおう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3499k/>

---

マイ.アイ.

2011年1月19日02時10分発行